



## 人間のルールだけで生きていると、見えないよ。

企業経営漫談士 岡野実空

いまや世界中に伝播した、「三方よし」+  $\alpha$  の“SDGs”。これは、その合意に先駆けること約20年前、関東交通広告協議会による公共広告のコピーです。(1995、小川しのぶ) 今回は、すでに社会人の常識の一部となった、“SDGs”の本質や要素と共にその盲点を確認し、未来の実現に向けた、私たちの日々の心がけや行動を考えます。

### 視点1: 背景と真意

関東交通広告協議会は、1961年に発足した関東私鉄八社協議会を母体に、その後、JR東日本や東京都交通局、さらに各社のハウスエージェンシーが加わって生まれた任意団体。初めは当時頻発した交通ストライキに伴う交通広告の補償問題が主題でしたが、その後も、社会の変化に対応した「ルール」作りなど、種々の議論の場となってきました。

そして前世紀後半、「地球環境保護」意識の高まりの中で制作されたのが、猫を主人公にした2枚の公共広告。一枚目の「楽しさは、自分の中から生まれるんだね。うん。」(第23号に予定)に続く、このコピーは、猫の目線から「人間」のエゴイズムを鋭く指摘し、公共交通機関の利用によって、省エネルギーへ貢献する意義を哲学的に訴えています。

### 視点2: 教訓と学習

ローマクラブが1972年に発表した、「人類の危機」レポート『成長の限界』。今回の主題、“SDGs”(持続可能な開発目標)は、その直後にストックホルムで開催された、国際連合の「人間環境会議」が起源。その後、国連による同種の会議は、ほぼ10年ごとに世界各地で開かれ、今日に至っています。

そして2015年9月の国連総会で、加盟193カ国すべてが賛同し、合意した目標が“SDGs”。その2030年の「未来の世界のかたち」は、「貧困の撲滅」を筆頭に、「経済」「社会」「環境」に関する17の目標(goal)と、それらを細分化した169の到達点(target)から成り立っています。またその実現に向けた行動の責任は各国にあり、その構成員である私たちには、個人および組織人としてそれを分担し、実行する義務が課せられているのです。

◆教訓: 危機意識<問題 意識<当事者意識

◆参考コラム:

『三々な経営』2-21ミドル・マネジャーの意識と行動

『四字熟語で考える経営戦略』

Y-02「外部環境」を考える・その1

さて“SDGs”を我が国流に言えば、かつての江州(近江)商人を研究した、戦後の学者による造語、「三方よし」(売り手よし、買い手よし、世間よし)に、時間軸の「子孫(未来)よし」を加えた「四方よし」。また空間軸としての「世間」も、その後の国際化、グローバル化によって、自分の周辺から地域、国家を越えるようになりました。

しかし「生まじめ」な? 我が国民性を考え、今後危惧されるのが、その絶対視。それはすべての「人間」の幸福の「必要条件」に過ぎず、文化や芸術のような「十分条件」が含まれていないからです。もちろん、猫の目線からの検証もされていません。

### 視点3: 異論その他

守屋浩に捧ぐ。いつもはがゆいじれたい。新概念導入→後進性指弾→資格検定コンサル暗躍→猫の目規制→次世代概念が出現。概念輸入大国として繰り返してきた周期です。嫌われ者の近江商人の自衛的処世術とも言われる「三方よし」を再評価できた学者が、もし英語で論文を書いていたらSDGsはTDGs(Three-Direction Goodness)だったのになあ。たまには黙ってないで世界に発信しよう。他国が受賞した今年のノーベル賞で自分達日本人の基礎研究が結実したと喜んでいる学者がいました。自分に分前を寄越せとは言わない。品よし、人柄よし、の二方よし。悲しい事に、人間の優しい観察者たる猫視線がグローバル視点に移行すると、陰徳は隠匿と大差ないのかも。  
(竹中雄三)

“SDGs”の実現で「未来」が存在しても、子孫から私たちは、「とんでもない祖先たち」と呼ばれます。その光景を、地獄から眺めるのでしょうか?

2020年10月19日 実空